# ウィトゲンシュタインの言葉と世界

黒　田　敏　夫

## 一

言葉は単なる道具ではない。言葉は人間と世界に結びついている。言葉の中に世界が見え、言葉の中に世界が現れてくる。言葉は世界を越えていくこともある。

この小論においては、前期ウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」(Tractatus Logico-Philosophicus)(以下『論考』と略す。)を通して「言葉」と「世界」の問題を考えてみたい。

ウィトゲンシュタインの言葉は、色々なところに引用される。例えば、「私の言語の限界が、私の世界の限界を意味する。」「語りえないことについては沈黙しなければならない。」などである。これらの言葉はウィトゲンシュタインの思想を正しく理解していないと、場合によっては逆の解釈をしてしまうこともあると思われる。この小論においては、言葉の意味と意義の問題を中心に前期ウィトゲンシュタインの思想を通して考えていきたい。

## 二

ウィトゲンシュタインの「論考」はカントが「純粋理性批判(Kritik der reinen Vernunft)」で理性批判をしたように言語批判をしているといえる。以下、「論考」における主要な文章を引用しながら、彼の思想の骨組みを学んでいきたい。

**「世界は、実際に生起することのすべてである。(Die Welt ist alles, was der Fall ist.)」**[1]

「実際に生起すること」とは「事実(Tatsache)」を意味し、「事実」の総体が「世界(Welt)」と呼ばれる。「事実」とは「事態(Sachverhalt)」が成立していることであり、**「事態とは、諸対象(Gegenstände)(事物 Sachen, 物 Dinge)が結合していることである」**[2] といわれる。「事実」について「語る(sagen)」のが「命題(Satz)」である。簡単にいえば言葉である。古来から哲学はその対象として「神」、「人」、「世界」についてのあらゆる問題について考えてきた。しかし、ウィトゲンシュタインが「論考」で語るのは、倫理的な事柄や価値的な事柄ではなく「命題」によって「語る」ことのできる世界内の「諸事実(Tatsachen)」についてである。ではなぜ「命題」は「事実」を「語る」ことができるのか。前期ウィトゲンシュタインは「写像理論(picture theory)」を主張する。

**「我々は我々に対して諸事象の諸像をつくる。(Wir machen uns Bilder der Tatsachen.)」**[3]

ウィトゲンシュタインは若い時、フレーゲやラッセルに影響され「写像(Abbild)」という概念を取り入れたのである。

**「像は現実の模型である。(Das Bild ist ein Modell der Wirklichkeit.)」**[4]

ごく単純化して説明すれば、「有意味 (Bedeutung)」なる「命題」には「事実 (Tatsachen)」が写されていると考えるのである。

**「像のなかではその像の諸要素が諸対象に対応している。(Den Gegenständen entsprechen im Bild die Elemente des Bildes.)」**[5]

ウィトゲンシュタインの言語哲学は、カントの「純粋理性批判」に似ているとよくいわれる。「命題」と「現実」の意味論的対応が、カントの場合は「悟性」の「思惟」と「感性」の「直観内容」の関係で述べられているといえる。「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である」[6] といわれる。カントにとっては、「受容性の能力」である「感性」が外界の存在を「直観の対象」として受容し、それに「規則の能力」としての「悟性」が「カテゴリー」を適用することによって、「経験的認識」が成立すると考えたからである。

**「写像関係は像の諸要素と諸事物との間の相関性から成立つ。(Die abbildende Beziehung besteht aus den Zuordnungen der Elemente des Bildes und der Sachen.)」**[7]

ウィトゲンシュタインは「命題」が有意味であるためには、それに「事実(Tatsachen)」が対応していなければならないと考え、「命題」は「事実」の「写像 (Abbild)」であると考えようとしたのである。

**「それぞれのしかたで——正しく、あるいは間違って——写像できるために像が現実と共有すべきものは、その写像の形式である。(Was das Bild mit der Wirklichkeit gemein haben muss, um sie auf seine Art und Weise—richtig oder falsch—abbilden zu können.)」**[8]

「事実」の「論理形式」と、「命題」の「論理形式」は同一であり、現実界の「像」と言葉(命題) で表される「像」は論理的に相似であると考えている。なぜ、「写像理論」をウィトゲンシュタインが採用したかというと、そこには「命題」の意味論 (semantics)と構文論 (syntax)の問題があったからだと考えられる。つまり、「像 (Bild)」と「現実 (Wirklichkeit)」の間に、諸要素の一対一の対応があるときが、意味論的対応があると考えられ、そして両者の間に形式の一致があるときは、構文論的な対応があると考えられたのである。

## 三

「論考」は最初に「現実 (Wirklichkeit)」を論じ、次に「像 (Bild)」を、そして「命題 (Satz)」について論じる。このあと、今度は「命題」から「像」について、また「形式」について述べていくのである。

**「命題は現実の像である。(Der Satz ist ein Bild der Wirklichkeit.)」**[9]

「命題」に「現実」が表されているとき、つまり、「命題」のうちに「現実」の「内容」や「形式」が含まれていることが述べられるのである。「形式」については「命題」の「論理形式」が「現実の形式」、「写像の形式」と一致していることが述べられる。ウィトゲンシュタインが「写像形式」を「現実の形式」と呼んだり、「論理形式」と呼んでいるのは、「命題」を一種の感覚的な心理的判断と考える心理主義に対して、論理的かつ実践的な「命題」として考えたからである。この姿勢はカントがヒュームの感覚に基づいた経験的認識は懐疑論に陥るとして拒否し、ニュートン力学が示す世界観を前提し、その認識論的基礎付けをしたことに似ているといえよう。

**「思想は有意義な命題である。(Der Gedanke ist der sinnvolle Satz.)」**[10]

**「諸命題の総体が言語である。(Die Gesamtheit der Satze ist die Sprache.)」**[11]

論理的構文論的規則に則っている「命題」は「有意義 (sinnvoll)」である。よって、「有意義 (sinnvoll)」な「言語 (Sprache)」とは論理的な理想言語といえる。しかし、ここでいわれている「思想 (Gedanke)」とは哲学的問題の考えや解決を示すものではない。

**「哲学とは言語批判である。(Alle Philosophie ist "Sprachkritik".)」**[12]

可能的論理空間の範囲を越えた哲学的命題は偽ではなくて、「非意義 (unsinnig)」な命題であると考えられる。これはカントの考えに近いものがある。カントが理性批判として行なっていることを、ウィトゲンシュタインは「言語批判 (Sprachkritik)」として行なっている。カントも同じように「哲学的命題」、すなわち「伝統的形而上学」が扱ってきた「霊魂」や「世界の全体」、「神」の概念は人間にとって重要な問題であるが、これらは可能的認識の範囲を越えており、人間の客観的な認識の対象になり得ないと考えた。

**「私の言語の限界は私の世界の限界を意味する。(Die Grenzen meiner Sprache bedeuten die Grenzen meiner Welt.)」**[13]

この文はよく誤解される個所でもある。人間は言葉をもつ存在であり、世界を言葉で捉え、それを理解し、言葉で表現する。人間にとっては、言葉で捉える世界が、私たちの世界であり、言葉の限界が世界の限界である、と考えることができる。このように考えること自体は意味があると思うが、ここでウィトゲンシュタインがいおうとしていることは、もっと意味が限定されている。既述しているように「言葉の形式」(命題の論理形式) と「世界の形式」(現実の形式) は一致している。私たちが「言葉」(命題) で「語る (sagen)」ことができるのは、可能な論理空間の範囲内でのみ、論理によって「語る」ことができるのである。ところで、「語る (sagen)」とは「言葉」(命題) が「現実 (Wirklichkeit)」、つまり「事態 (Sachverhalt)」の内容を「説明する (erklären)」ことである。また、「言葉」(命題) が「示す (zeigen)」とは、「命題の意義 (Sinn)」や「命題の論理形式」、「写像形式」、「現実の形式」、「論理形式」を「理解する (ver-

stehen)」ことである。

**「命題はその意義を示す。(Der Satz zeigt seinen Sinn.) 命題は、それが真であるならば、(事物が) どのように関連して (事態をなして) いるかを示す。そして (事物が) そう関連して (事態をなして) いるということを、それ (命題) は語る。(Der Satz zeigt, wie es sich verhält, wenn er wahr ist. Und es sagt, dass es sich so verhält.)」**[14]

つまり、ウィトゲンシュタインが主張していることは、「言葉」(命題) が「語ることができる」のは、「言葉」と「世界」に共通する「論理形式」を持つ「可能的論理空間」の範囲内であり、その限界内で、「内容」を「語り (sagen)」、「形式」を「示す (zeigen)」ことができるのである。

ウィトゲンシュタインが「論考」で試みているのは、言葉の論理的使用の限界づけである。カントが「純粋理性批判」で行なったような理性能力の吟味と使用範囲の制限と同じような言語批判である。

しかし、このことは「言葉」の使用を単に限界づけ、厳密に制限することを目的としているのではないと思われる。ウィトゲンシュタインは「言葉」(命題) によって「語り得ない」範囲を明らかにすることによって、同時に「語り得ないもの」を明らかにしようとしているとも思われる。そして、この領域にこそ、彼の最大の関心が常に向けられていたといえる。

## 四

「論考」において、「命題」によって「語る」、あるいは「示す」主体である「私」はどのように扱われているのであろうか。例えば **「私の言語の限界は私の世界の限界を意味する。(Die Grenzen meiner Sprache bedeuten die Grenzen meiner Welt.)」**[15] の文を見てみると、「命題」を「語る」主観は「私の言語の限界 (die Grenzen meiner Sprache)」、「私の世界の限界 (die Grenzen meiner Welt)」というように「私の (mein)」で表されている。

今までは、カントとの類似点をあげてきたが、この「私 (Ich)」に関しては少し異なっている。確かにカントの場合も、認識主観は「私の表象 (meine Vorstellung)」として、あらゆる表象に伴うものであるが、論理的認識能力の根拠である「統覚 (Apperzeption)」は「悟性能力」の頂点にある「論理的我」である。このようにカントは論理的認識主観としての「私 (Ich)」を考えている。

カントの立場を「認識論的主観主義」とするならば、ウィトゲンシュタインの立場は「独我論 (Solipsismus)」[16] であるといえる。

**「すなわち、独我論が思うことは、全く正しいが、ただそれは自身を語ることはできず、自身を示すだけである。(Was der Solipsismus nämlich meint, ist ganz richtig, nur lässt es sich nicht sagen, sondern es zeigt sich.)」**[17]

**「私は私の世界（小宇宙）である。(Ich bin meine Welt. [Der Mikrokosmos.])」**[18]

この文（T5.63）は、本来は非意義的命題である。それはウィトゲンシュタイン自身が述べているように「私は」「語り得ない」内容であるからである。それでもなお、このように述べているのは彼が「語り得ないもの」こそ、哲学における重大な問題であることを考えているからであろう。

「私は」という主観は対象とはならず、「私」は「私の世界」として、私の個人的経験世界として表されるのである。「私」、すなわち「主観」が全く消えてしまい、「世界」のみが存在するというのでは勿論ない。

**「主観は世界に属さず、それは世界の一限界である。(Das Subjekt gehört nicht zur Welt, sondern es ist eine Grenze der Welt.)」**[19]

「私」すなわち、「主観」は「世界」に属するものでもなく、また「世界」の外に存在するものでもなく、その「限界（Grenze)」である。「論考」の「主観」は「世界の限界」つまり「収縮して無延長の点」[20] として「世界」に属さず、「世界」を越えたところに存するのではなく、「私の世界」を存立させる（基礎付ける）ものである。

「論考」の「言語批判」は「言葉」の使用を厳密な意味で限定している。「言葉」が「語る（sagen)」内容、「示す（zeigen)」対象は、厳密に限定される。ウィトゲンシュタインはカントと同じように、理論的認識の限界付けと基礎付けをしている。言語批判を通して理論的記述の限界を明らかにし、客観的「命題」の確実性を基礎付けたのである。「語り得ないもの」を明らかにしながら、逆に「私」、「神」、「世界の全体」、「価値」の問題点が明らかになっていくのである。ウィトゲンシュタインは「語り得ない」という仕方で「語り」、「語り得ない」内容や対象についての「語る方法」を指し示してくれるのである。また、ウィトゲンシュタインにおいてはカントと同じように、その説そのものには受け入れがたいところが多々あるにしても、彼らの言語批判（理性批判）に従って、考えていくことによって、私たちは哲学の多くの問題点とその解決の方向性に気付かされるのである。

**註**

1 Tractatus Logico-Philosophicus 1（以下、T1 と記す）

2 T2.01

3 T2.1

4 T2.12

5 T2.13

6 Kritik der reinen Vernunft B.75

7 T2.1514

8 T2.17

[9] T4.01

[10] T4

[11] T4.001

[12] T4.0031

[13] T5.6

[14] T4.022

[15] T5.6

[16] 独我論（唯我論）：「実在するのは自分の自我だけであって、他我およびいっさいのものは、自分の自我の意識内容として存在するにすぎぬとする立場」 哲学事典（平凡社）

[17] T5.62

[18] T5.63

[19] T5.6321

[20] T5.64